

3

いっぴき いぬ くち おお にく
一匹の犬が、口に大きな肉のかたまりをく
わえて、まち なか はし
わえて、町の中を走っていました。

にく さき にく や みせさき
この肉はつい先ほど、肉屋の店先からぬす
んだものです。

お にく や てんいん ふり き いぬ
追いかけてきた肉屋の店員を振り切り、犬
まち い ぐち ちい はし うえ
は町の入り口にかかる、小さな橋の上までや
ってきました。



「さてと。ここまでくれば、もう^お追いかけて
こないだろう」

^た立ち止^どまった^{いぬ}犬は、ふと^{はし}橋^{した}の下をのぞきこ
みました。

すると川の水の中に、自分と同じように肉^{にく}
をくわえている^{いぬ}犬がいて、じっとこっちを見
ているのです。

それは、自分の^{じぶん}姿^{すがた}が水面に映^{すいめん}っているだ
けだったのですが、もちろん^{いぬ}犬にはそんなこ
とはわかりません。



1 5

A single dog was running around the town with a big chunk of meat in its mouth.

The dog stole that meat from a butcher's shop just a little while before.

After escaping from a butcher's shop clerk, the dog came to a small bridge that went towards the town's gate.



"Alright. I've run far enough.
There should be nobody chasing
after me anymore."

The dog stopped and happen to look
under the bridge.

And so, on the water surface, there was
also a dog holding a chunk of meat and
looking back at it.

Although that was simply a reflection of
itself that appeared on the water surface,
the dog couldn't know such a thing.



